

左遷人生もまた楽しからずや

坂中英徳

坂中英徳はヘイトスピーチ団体の不倶戴天の敵

移民亡国論者たちは日本民族の消滅危機を正視しない。迫り来る人口秩序の崩壊に対処するための方策を考えることもない。もっぱら移民排斥を叫ぶ人たちだ。その代表格のヘイトスピーチグループはマイノリティーを攻撃する人種憎悪団体だ。

移民反対派の書いたものを読むと、人口危機の深まりとともに経済、社会、文化が衰退してゆく将来を憂える人はいない。新しい国民を増やすのに抜群の効果のある移民政策以外の、人口問題の有効な解決策を示す人もいない。

移民が入ってくると日本文化の純粋性が損なわれると口をそろえて言うが、肝心要の日本文化の担い手(日本民族)が消えてゆくことについては危機感を持っていないようだ。

その一方で、移民国家の議論がはじまったのを契機に、インターネットの世界でヘイトスピーチの連中による「移民1千万人の坂中英徳は売国奴」という個人攻撃が一段と激しさを増している。言うまでもなく、それは坂中構想に対する理論的批判ではなく、移民嫌いの立場からの感情的反発にすぎない。

以上のことについては、日本人が頑強に守ってきた移民鎖国体制の打破の急先鋒に立つ坂中英徳に非難・罵倒が集中するのは当然と考えている。移民亡国論者にとって移民興国論を唱える坂中は不倶戴天の敵ということなのだろう。

それに加えて、在特会＝ヘイトスピーチ団体は、在日朝鮮人の法的地位の安定をもたらした『坂中論文』(1975年)の著者を目の敵にしてきた。「在日朝鮮人政策」と「移民政策」の二つを立案した坂中英徳はヘイトスピーチの最大の標的と見なされている。

移民政策一本の道を歩んだ我が身の因果と受け入れる。移民反対派の攻撃を一身で受け止める。人種差別や民族差別を主張する排外主義団体にくみしない圧倒的多数の国民の良識が私の救いである。

集中攻撃を浴びるのは正論を吐いた人間の宿命

法務省入国管理局に勤務していた時代、誰も触れようとしない問題、たとえば在日韓国・朝鮮人の処遇問題(1975年)、フィリピン人興行入国者の人身売買問題(1995年)、北朝鮮残留日本人妻の帰国問題(2002年)など、出入国管理行政上の難題と取り組んだ。

いつも私の問題提起から始まった。脅しと批判の集中砲火に見舞われ、解決まで長い期間を要した。

2005年に公務員生活を終えた後は、一般社団法人移民政策研究所の所長として移民政策の理論的研究に専念してきた。

2014年に入り、私の立てた「移民50年間1千万人構想」が国民的課題にのぼり、排外主義者・国粹主義者・ヘイトスピーチグループなどによる坂中打倒の動きが目立つようになった。

何回も修羅場をくぐって多くのことを学んだ。脅迫・非難・罵倒が集中するのは正論を吐いた人間の宿命と冷静に受け止める。自分は正しいことをしているのだと自らに言い聞かせて機が熟するのを待つ。

運と奇跡が頼りの冒険家のような人生が尋常なものではないことは自分でもわかっている。綱渡りの連続の役人生活をすごした。何とか無事退職できたが、命があったのが奇跡と友人からいわれた。「運が7割。努力が3割」の無理に無理を重ねた生き方をしてきたというのが実感である。最近、妻子から「できもしない無謀なことばかりやっている」と言われたが、それはあたっている。

泥沼に足を突っ込み、もがき苦闘する、あまりにしんどいことばかりの続く職業人生だったが、無人の荒野を一人行くがごとく、やりたいことを思う存分やらしてもらった。時には波乱を巻き起こし、時には万丈の気をはいた。死闘が続いたが、奇跡的に生き残った。

1975年の坂中論文から40年間、わたしは批判と罵倒の連続の人生を生き抜いてきた。我が身に批判が殺到するのは天が与えた試練と受け入れる心境になった。もう怖いものは何もない。日本再興の捨石になる覚悟は固まっている。

左遷人生もまた楽しからずや

1995年の春、法務省入国管理局入国在留課長として、それまでアンタッチャブルとされてきた興行入国者問題にメスを入れた。私は陣頭指揮をとって、1995年5月から翌96年3月まで、興行入国者の「出演先」であるバー、キャバレーなどへの実態調査を全国規模で実施した。

その結果、調査した444件のうち、実に93%にのぼる412件で資格外活動等の不法行為が確認された。その調査結果を受けて、興行ビザによる入国者の規制を強化した。

それは興行入国者の大幅減となってすぐに効き目が現れた。1994年に約9万人だった興行ビザによる入国者数が、翌年には5万9000人に減り、1996年には5万5000へとさらに減ったのである。

この規制措置に対して、芸能人の招聘者であるプロダクションや、ホステスとして使っていたバーやキャバレーなどの飲食店の経営者が猛烈に反発した。

背後に暴力装置を備えた巨大な業界であるだけに、脅しによる調査妨害に始まり、損害賠償請求や罷免請求といった法的措置、私への脅迫電話、個人攻撃、はたまた坂中は一週間以内に交通事故に遭うという警告など、手をかえ品をかえ、執拗に繰り返された。

業界の意を受けた政治家まで登場し、「君はいったい何をやっているのだ。お前みたいな頑固者の役人がいるから業界が迷惑するんだ。君は転職したほうがいい」と圧力をかけてきた。私は政界の実力者のごり押しに屈しなかった。

結果、1997年4月の人事異動で仙台入国管理局長の辞令を受けた。以後、二度と法務本省で勤務することはなかった。

福岡入国管理局長、名古屋入国管理局長、東京入国管理局長のポストを歴任し、2005年3月、法務省を退職した。

8年間の地方局長時代、私は何をやったのか。暇をもてあましていたわけではない。実は、ルーチンワークをこなすかわら、執筆活動に精を出していたのだ。その成果物として、次の6冊の本を出版した。

- ①『出入国管理及び難民認定法逐条解説 新版』（共著、日本加除出版、1997年）
- ②『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、1999年）
- ③『出入国管理及び難民認定法逐条解説 全訂版』（日本加除出版、2000年）
- ④『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、2001年）
- ⑤『外国人に夢を与える社会を作る——縮小してゆく日本の外国人政策』（日本僑報社、2004年）
- ⑥『入管戦記』（講談社、2005年）

もう一つ集中的に取り組んだことがある。1997年の夏から、10年以内に訪れる人口減少社会の移民政策のあり方を考える思索一筋の生活を送った。そのアイデアが固まった総論部分を前記の『入管戦記』第10章（「小さな日本」と「大きな日本」）で披露した。

私の左遷時代は実り豊かなものだった。いま思うと、世界をリードする移民政策理論の創作につながる雌伏期間であった。頑固一徹のところがある私はたびたび左遷を経験したが、逆境の入管生活も悪くなかったと思っている。

ここで付言しておきたいことがある。最近、在日歴の長い英国人ジャーナリストから、「革命的な移民国家構想を公言している坂中さんへの官邸からの圧力はないのですか」と聞かれた。私は「四面楚歌の状況が続いているが、永田町、霞ヶ関から坂中構想に対する批判、圧力は一切ない」と答えた。彼は「日本は自由にものが言えるいい国ですね」と感心していた。

日本政府は危険な思想家の唱える移民革命思想に寛大である。やりたいことを自由にやらせてもらったので、世界の知識人から「ミスターイミグレーション」と評価される今の坂中英徳があると思っている。

移民国家に導くことも夢ではない

日本の歴史はじまって以来の移民革命を先導しているのだから批判の集中砲火を浴びるのはあたりまえである。個人攻撃が坂中英徳ひとりに集中するのもやむをえない。一切の責任は移民政策の口火を切った坂中にある。私が敵役にまわることによって歴史の歯車が動くのなら本望である。

なぜ非難と罵倒の連続に見舞われるのか。なぜいつも孤軍奮闘なのか。

およそ現状維持と満場一致が好まれる日本では、社会の常識をくつがえす異端の徒は嫌われるということではないか。革命を恐れぬ危険人物ということなのだろう。

今さら異端者の生き方を変えるつもりはない。いかに反対勢力が強力であっても、いかなる脅しを受けようとも、孤独の闘いがどこまで続こうとも、信念を貫き通す。

移民国家への道は歴史の必然であるとの思いを胸に秘め、大方の国民の理解が得られる日の到来を静かに待つ。

4月18日の朝日新聞が、「戦後、移民——日独世論調査」の結果を発表した。それによると、「永住を希望して日本にやってくる外国人を、今後、移民として受け入れることに賛成ですか。反対ですか」の質問に対して、移民に賛成が51%、移民に反対が34%で、賛成が反対を上回った。この世論調査の結果は私に勇気と希望を与えてくれた。歴史は移民国家の創成に向かって力強く動きだしたと感じる。

移民国家ニッポンの姿が視界に入ってきた。移民国家への道のりは難行苦行の連続であったが、今後も初心を忘れず努力すれば、日本を移民国家に導くことも夢ではないと思う。